

第3回京都文学レジデンシー/Kyoto Writers Residency 03

2024.09.29-10.26

いつも京都文学レジデンシーを応援くださりありがとうございます。
第3回レジデンシーのご報告をお届けします。

E-MAIL: kyotowritersresidency@gmail.com / WEBSITE: kyotowriters.orgX: [@kyoto_writers](https://twitter.com/kyoto_writers) / Instagram: [@kyotowritersresidency](https://www.instagram.com/kyotowritersresidency) / note: [@kyoto_wr](https://note.com/kyoto_wr)

オープニング・フォーラム「異物と創作」@香老舗 松栄堂・薫習館

なにせ、10名である。2023年は5名の作家・詩人・翻訳家が参加したわけだから、その2倍のレジデントが一堂に会したとなると、それはそれは壮観だった。滞在先の近くにあるお寺に散歩に行った話から、フィリピン名物の乗合タクシーの内装の話まで、出てくる話の多彩さも実に愉快だった(それをよどみなく通訳してくれた吉田さんには感嘆と感謝の念しかない)。司会の僕は質問を3つ用意していったのだが、2つ目を終えたところで、すでに時間は30分オーバーしてしまい、訊けずじまいのことがあった。そのひと月後、今回のレジデントであるパオロ・ティアウサスとインドネシアの詩人ノーマン・エリクソン・パサリブのトークイベントの司会を務め、今回こそはその質問を試みようと思気込んで行ったのだが、ふたたび時間オーバーになり……。「言葉はどこから生まれて、どこに向かうのか？」この問いは、どこにも行き場がないまま宙吊りになっている。(藤井)



クロージングイベント

朗読会 @京都 蔦屋書店

クロージングイベントである恒例の朗読会は、京都のご真ん中、2023年末にオープンしたばかりの京都高島屋S.C. (T8) 6階、京都 蔦屋書店シェアラウンジにて2024年10月26日夜に開催された。はじめての有料朗読会ではたして来てくれる人がいるのか、実行委員会一同ドキドキしたもの、当日は立ち見も出るほどの盛況。江南さんが準備した翻訳詩のハンドアウト50部があつというまに消えてしまうほどだった。

司会はレジデンシー実行委員会メンバーで書評家の江南亜美子さんが担当。作家の生の声をひとつの場所に集って聞くという唯一無二の場を盛り上げた。朗読会ではいつもレジデンシーの仲間同士が互いを紹介する趣向となっている。パオロ・ティアウサスさんがトッパバッテリーのクリスティナ・ドンブロフスカさんを紹介し、彼女が読み終わると次



のクレア・ウィグフォールさんを紹介……という風に。去年から倍増の10名が朗読するとあって、ひとりひとりの朗読持ち時間は1分でお願ひ！と作家たちには事前に伝えていた。けれども作家たちはそんなことは気にしない。次の朗読者を紹介するにあたって、ひと月を共に過ごした仲間についてのエピソードを語ってくれたり、自作を読み始める前に、京都での思い出を分かち合ったり、作家同士、レジデンシー関係者、会場の参加者へと届けられる、自作品の響きだけにとどまらない言葉の贈り物。とはいえ、予想外に饒舌だった彼女らのトークを通訳する私は必死である。でもこういった自由自在さこそが朗読会の魅力だったことを思い出した夜だった。

今回は詩の朗読を生で聞くのがはじめての言語もあった。たとえば、リトアニア語。オーシユラ・カジリユーナイテさんは、作品によって深い声からユーモアを交えた甲高い声まで使い分ける。トリを務めたティアウサスさんは身振りを交えながら跳ねるようなリズムでタガログ語と英語で詩を演じてみせた。

会場の京都 蔦屋書店シェアラウンジは作家がひと月間通ったワークスペースでもあった。この空間に特別な愛着と思い出を作家たちが抱いていることが、彼女たちの思い出話や振舞いから伝わってきた。この場所もまた作家の脳内地図に刻まれるのだ。

ひとり5分にも関わらず、終わってみると残された歓談の時間はごくわずか。また会おうねと作家たちは帰路についた。(吉田)

2024年イベント報告

ヨーロッパ 文芸フェスティバル

*写真はEU MAG (駐日EU代表部公式ウェブマガジン) より拝借
<https://eumag.jp/article/eujapan1124/>



10月11日から14日まで2024年ヨーロッパフェスティバルが開かれた。池澤樹氏によるギリシャの詩人カヴァフィイについての講演を皮切りに、都内各地でEU各国の文学をテーマとした企画が20本。京都文学レジデンシーからはリトアニアの作家オーシュラ・カジリユーナイテ氏とポーランドの詩人クリステイナ・ドンブロフスカ氏が参加した。オーシュラは自身の撮った短編映画「Plants Which Grows in My Sky」を上映し、翻訳者の木村文氏と映画の中の植物としての詩について語

った。クリステイナの相手は私。彼女の詩「The Face of My Neighbor」に芭蕉の句を掛け合わせて「隣は何をする人ぞ」と題して、自己と他者をテーマに互いの詩を読むみ合ったのだが、圧巻はクリステイナの詩「Spirit of the Heart」に合わせて、千葉広樹がコントラバスと電子音楽の曲を演奏し、遊舞舎の優子と慶子が舞踏を舞う即興競演。イベントの後にはオーブンマイクのパートタイムに詩歌の声が行き交った。(詩人・四元康祐)

京都文学レジデンシー&ヨーロッパ文芸フェスティバル連動企画 「ポーランド、リトアニア、アイオワ、京都、東京」

2018年にアイオワのレジデンシー (IWP) を共に過ごしたオーシュラが京都レジデンシーに来ると知り、滝口が永方さんに「東京でも何かやろう」と持ちかけたことから始まったこのイベント。永方さんのIWP同期のクリステイナの参加や、日程も内容も未定のまま会場利用を内諾してくれたB & B、そして欧州文芸フェスの協力もあり無事開催にこぎつけた。それぞれのアイオワの思い出、各地のレジデンシーでの経験が和やかに語られる一方、ポーランドとリトアニアそれぞれの詩や文学をめぐる歴史や現況についての話もあり、また永方さんからは日本やアジア諸国との対比的な話題も示された。進行役の滝口の適当さもあって予定時間を大幅に超えたが話は尽きず、参加者にもそれぞれの文学にかける意志や真摯な姿勢が伝わる一夜になったと思う。(小説家・滝口悠生)

冷泉家訪問

伝統と和歌の邂逅
十月五日。京都御苑の向かいに位置する、現存する唯一の公家屋敷である冷泉家の一室に、クリステイナ・ドンブロフスカ、アンバー・アダムズ、パオロ・ティアウサスの三人の姿があった。この日三人が見学したのは、藤原俊成・定家を祖とし、宮中の和歌指南役を務め続けた冷泉家が月に一回、門人に和歌道を指南する月次会である。会では毎月、その季節ならではの歌題が提示され、どの様子がその事物が歌われてきたか、受け継がれてきた言葉の指南が行われる。三人もこの日、当月の当座題であった「菊」をテーマに、伝統和歌で詠まれてきたイメージを参考にしつつ、各自の言語で和歌形式の詩を作成。以前から日本の短歌型に興味を持ってきた彼らにとって、「書く」と「歌う」が一体となった伝統和歌の朗詠に耳を澄まし、自身でも水から墨をすり、和紙に文字を記す経験は、今後の創作に大いに刺激となったようだ。(詩人・永方佑樹)

アイオワ国際創作プログラム (IWP) とのコラボレーションが実現したのは10月18日、京都文学レジデンシーも終盤に差し掛かった頃だった。京都朝の9時。KWRO3の参加作家9名が、夜7時のアイオワとの繋がりを求めて、京都市にある北の果ての大学に集まってくれた。教室に入ると、初めましての顔が3名。立命館大学の学部生も朗読しにやってきてくれたのだ。京都組にアイオワ組、さらには過去のIWP参加メンバーも加わり、リレー形式でマイクを繋いだオンライン朗読会は、京都会場でもアイオワ同様、大きな盛り上がりを見せた。もちろん全員がその場にいる朗読会の方が良いには決まっているけれど、zoomを開けばリアルタイムで世界の朗読が聴ける、なんていうのもなかなか悪くない。遠いような近いような、画面越しという状況が作り出す不思議な感覚の中、みんなが一緒に耳を傾けていたあとき、間違いなく私たちは同じ時間を過ごしていたのだから。(杉本)

KWR × IWP 朗読会



懐かしのIWP参加者の顔あり、観衆とのセッションあり、憧れの作家の朗読あり……と、アイオワの国際創作プログラム (IWP) と京都文学レジデンシーのコラボイベントは、アイオワ側の会場では熱狂のうちに幕を閉じた。会場にはIWP参加作家、関係者、学生、一般市民などあわせて、60名以上が会場に押しかけて、コラボレーション朗読を愉しんだ。アイオワ側からの朗読参加者は有志を募り、8か国9名の詩人・作家が朗読に参加してくれた。IWPのディレクターであるクリストファー・メリルも、詩人として登壇するというサプライズもあった。京都文学レジデンシーが、伝統あるIWPとの懸け橋となり、世界文学と日本文学をつないだ瞬間だった。(澤西)

熱触療法と7カ国語のカルテ



10月20日Collabo Earth LE9で、今宿未悠さんは参加作家たちと共に「熱触療法」を実施した。報告者が開催場所を訪れたとき、オーシュラ・カジリユーナイテさんと今宿さんの1対1のリハビリテーションが行われ、先に体験したポリー・バートンさんはその様子を観察していた。音声案内に従い、二人は前準備として問診票の読み合いと白衣の着用、激しい呼吸運動を行う。そして本番、二人はパラフィンバスの傍に座り「あなたの手と、隣にいるあなたの手を握り合わせてください」という音声とともに手を握り合い、熱せられたパラフィンに手を出し入れさせる。約8分後、握り合せた手を覆う分厚く白いパラフィンを冷やし固め、形を崩さないようステンレスバッドの上に乗せると同時に熱触療法は終了する。

作家たちは熱触療法で体験・観察した記憶をたどり、それぞれの言語で身体感覚にまつわる文章を綴った。身体と向き合った作家たちの作品は、今宿さんによって一冊の本に編まれ、各々の創跡が触れ合うことになる。(石田)

第3回京都文学レジデンス 参加作家から一言



■ Krystyna Dąbrowska / クリスティナ・ドンブロフスカ

京都文学レジデンスは執筆と探検、探検と執筆が素晴らしく組み合わせられたものでした。それは、蔦屋書店にある贅沢なワークスペースにいるときも、寺院の庭にいるときも、あるいは数時間の散歩の後に白川の土手に座って足を水に浸しているときもそうでした。忘れられないひと月、叶えられた夢。見たもの全て、経験したこと全て、そして仲間の作家たちの作品を知ることのできた機会に感謝しています。帰宅は、詩や新しいアイデアの下書きでいっぱいノートと一緒に——そう、数ヶ月後に向けた、何にも変えがたいインスピレーションと創作の源と一緒になのです。

■ Polly Barton / ポリー・バートン

レジデンスでの経験が私にとってどれほど特別で、どれほど感謝しているかを知ってほしい。最初に到着した時から、日本にまつわる全てが違う「異質」なものに感じた(だからオープンニングプログラムタイトルはとっても的確だったと思う)。出会うもの全てに驚き、好奇心をそそられた。それら全てに浸りたかった。再び思考を辿り、私の出会った新しいもの全てがどのように創作のアイデアを掻き立てるのかを再び目撃できる、そんな時間と余白があることを楽しみに、ノートのページをびっしり埋めていった。そして、日本で

■ Clare Wigfall / クレア・ウィグフォール

の経験だけが生み出しうる、そんな物語に取り掛かり始めた。そのことにとってもワクワクしている。他の作家たちと親睦を深めるのも大好きだった。とりわけ、同じ寮のクリスティーナととても親しくなれたし、もうすでに再会も果たしたところ。また別の日には近くの本屋でポリーの本を見つけた。今週はベルリンでオーシュラの作品を朗読するんだけど、上手くいくといいな。こういった繋がりが続くのはとても素敵なこと。全てが素晴らしい経験だった。

■ Tristan Ledoux / トリスタン・ルドゥ

京都に来る前は、ライティング・レジデンスとは何かを知りませんでした。ベルギーやフランスでの滞在を試みたことはありましたが、なんと日本に滞在の機会が得られるとは。KWR、恭子さん、WBIの皆さん、こんなに特別な冒険を提供してくれて本当にありがとう！完璧で、本当に優しいチームでした。クローキング・イベントでお話したように、住み慣れた土地を完全に離れ、全くの異文化に浸ることで、日常生活の束縛はもちろん、怠惰さや自信のなさがもたらす言い訳——それはいわば自分自身との間に結ぶ不可解な契約——から逃れることができました。そうすることで、どんなものであれ物語を生み出そうと思えたのです。京都の蔦屋シェアラウンジは、この4週間という濃密な時間の中、最高の状態で目指すものを追求する、そんな手助けを、レジデンスに参加したフレンドリーな作家たちは、互いに励まし合える、そんな仲間意識を与えてくれました。友情の絆が、我々を分つ海を越え始めたのです。最後になりましたが、アンスティチュ・フランセで、翻訳者たちを前に作品を発表できたことで、自分が認められたことをはっきりと実感しました。この場を借りて心から感謝を申し上げます。

■ Paolo Tiasas / パオロ・ティアウサス

レジデンスは、とりわけ芸術家や作家を支えるプログラムが限られた国からやってきた一作家の私にとって、人生を変える出来事だった。レジデンスは、再び創作に集中するよう導いてくれた——他の作家らとの対話に連帯、京都の文化と歴史、レジデンス・スタッフの支え、その全てが価値あるものだった。レジデンスは、創作の花を咲かせる手伝いをしてくれた。

■ Dario Voltolini / ダリオ・ヴォルトリーニ

京都文学レジデンスは私の初めてのレジデンスであり、素晴らしく信じられないくらいに豊かな経験だった。仲間の作家たちはみんなそれぞれ魅力に溢れた才能あるアーティストたちだった。街は世界で最も魅惑的な内の一つであり、チームは完璧だった。これ以上のことはないだろう。

■ Colleen Maria Lenihan / コリーン・マリア・レニハン

京都の美しさと豊かな文化に浸りながら、どの通り、どの庭、そしてどの寺の中からも無限のインスピレーションを得ました。最高のワークスペースが力を呼び起こしてくれたけれど、本当の意味での一番は仲間の作家たちと共に、物語や見通しを共有できたこと——彼らとの繋がりが私の心と技を豊かにしてくれたのです。

■ Amber Adams / アンバー・アダムズ

このレジデンスは素晴らしく奥深いものでした。他の作家たちとの繋がりが、そして京都の不思議を探求する自由が、私を、私の創作を変えてくれました。レジデンスの他のメンバーは、十人十色で面白かった、そしてプログラムは私の執筆を大いに支え、京都、東京の文学コミュニティとの密接な繋がりを提供してくれました。

■ 今宿未悠

どんな物語よりもフィクションみたいで恵まれた環境、人々の中で、詩を書くとは如何なることかを深めていけました。世界と出会うことで日本語が相対化され、その形や音の特殊性や自らの愛着を再認識し、詩の書き方が変わっていったことを嬉しく思います。欧州ではこのような文学レジデンスが当たり前に存在すること。日本でも同様の環境が増えることを望みます！その呼び水としてのKWRに深く感謝したいです。

.....ごあいさつ.....

KWR03 の実現に向けて、たくさんの方よりご支援を頂きました。香老舗松栄堂様、DMG 森精機株式会社様、株式会社共立メンテナンス様、丸善京都本店様、京都 蔦屋書店様、早稲田大学様にご支援を頂きました。また、国際交流基金様、Arts Aid KYOTO (京都市) 様、ベルギー王国フランス語共同政府国際交流振興庁様、イタリア文化会館-大阪様、欧州連合 (EU) 様、リトアニア文化カウンシル様、クリエイティヴ・ニュージーランド With the support of Creative New Zealand 様より、特別共催・助成を頂きました。個人サポーターとして中島京子様、田中裕希様、神羽登様、その他 1 名 (匿名希望) および対面イベントの参加者の皆様からご寄付を頂戴致しました。実行委員会一同、心より御礼申し上げます。頂いたご支援を大切に活かし、100 年続くレジデンシーを目指していきたいと思ひます。(西岡・澤西)

2024 年度公募について

なんと今年度は昨年度より応募者 3 倍増、言語の種類は 36 言語と倍増しました！ (ニューズレター前号にも報告がありますのでご参照ください) そこから日本語作家 1 名と日本語以外の作家 2 名がレジデンシーフェローとして選抜され、加えて、EU 加盟国の作家 1 名、ASEAN 加盟国の作家 1 名がそれぞれ EU フェロー、国際交流基金 ASEAN フェローとして選抜されました。また昨年度同様フランス語圏ベルギーでも別途公募が実施されました。公募は本レジデンシーにとってとても大切なプロセスです。作家の履歴ではなく作品を読むことで応募者の可能性を信じてこれからも参加者を選びたいと公募審査委員会では考えています。来年度も春のはじめに公募を実施予定です。日本語作家の応募が諸国語勢に比べるとまだまだです。公式ウェブサイトや SNS でのお知らせに注目してください。(吉田)

実行委員とは名ばかりで、作品サンプルの翻訳ぐらいしかお役に立てていないのですが、この仕事はなんというか、楽しいんですけど、もどかしいところもあります。ぼくが担当するのは主に短編小説の抜粋ですが、自分ではもちろん、作品全体を読んでから訳すわけですね。で、去年訳させてもらったジョセフィン・ロウさんの「小さな世界」、今年のクレア・ウィグフォールさんの「ルースとキット」、これがどちらも、毛色は違うけどものすごくいい

小説の味見

いい作品だった。そうなる、ほんのひと口ぶんだけ切り取って紹介するのが、なんかもう深いことか思えてくる。むしろ作者が精選した一節を、こちらもがんばって訳すわけですが、ぜんぶ読んだときの圧倒的な味わいはつまみ食いじゃわからないよなと……そう、小説とはコース料理、ソーセイジじゃないんだよと頷きながら、消えたスーパの試食コーナーが無性に恋しくもなるのでした (お兄さん、これ食べてて!)。(森)

個人様・企業様からの寄付がレジデンシーの大切な資金源です。寄付ページはこちら>>>



BOOK FAIR

@丸善 京都本店



今年で 2 度目となった京都文学レジデンシーの選書フェア。丸善京都本店さんは、初年度から京都文学レジデンシーを全力で応援してくださっており、フェア展開もレジ前の目立つ場所を毎年確保していただいています。本年は「①招聘作家による選書」と「②レジデンシー実行委員会メンバーによる選書」のふたつでフェアを構成しました。「招聘作家による選書」では、ジョージ・ソーンダーズやアリス・マンローなど日本でも人気の海外作家、そして日本人作家の作品として川上未映子や津村記久子など約 30 点が並びました。実行委員による選書は「海外文学の入り口」をテーマに「文庫本しぼり」で構成され、カズオ・イシグロ、ポール・オースター、アンソニー・ドーア、トマス・ピンチョンなどなど約 40 点を選定。9 月上旬から約 2 か月開催されたフェアは、例年以上に多くの方に楽しんでいただけたようで、売上は昨年より倍以上だったとか (丸善京都本店ご担当者さま談)。お買い上げいただいたお客様、そしてご協力いただいた丸善京都本店さん、本当にありがとうございました。(宮迫)

●京都文学レジデンシー実行委員会常任委員：吉田恭子/澤西祐典/藤井光/河田学/江南亜美子/宮迫憲彦/森慎一郎 /勝治真美/黒田純一郎/西岡亜紀 ●学生スタッフ：石田航大/加藤袖月/杉本はなな/永田玲/山田絵里奈

■主催：京都文学レジデンシー実行委員会 ■共催：立命館大学国際言語文化研究所/龍谷大学/京都芸術大学 ■特別共催：国際交流基金 ■協賛：香老舗 松栄堂/DMG 森精機株式会社/株式会社共立メンテナンス/丸善京都本店/京都 蔦屋書店/早稲田大学 ■助成：Arts Aid KYOTO (京都市) /ベルギー王国フランス語共同政府国際交流振興庁/イタリア文化会館-大阪 (特別協力) /欧州連合 (EU) /リトアニア文化カウンシル/クリエイティヴ・ニュージーランド With the support of Creative New Zealand ■後援：京都市/一般社団法人 京都経済同友会/京都市教育委員会 ■共同プロデュース：MUZ ART PRODUCE/CAVABOOKS